



先月下旬に完成したばかりの「リブハコ」

して起草した人たちの声。さらに、町の定住施策の紹介や子育て関連の情報（施設や教育の紹介、支援制度など）、町の地図など。移住者へのインタビューでは、若者世代の夫婦、若手の寄木細工職人、高齢者が登場。

助け合う心をマークで

小田原 飯山さん 世界へ発信

手助けが必要な人に対し、協力できる気持ちを送りたい。そんな思いを表すマークを、広める活動「EMPO WER Project」が先ごろ立ち上がった。中心人物は、小田原市出身で東京大学3年の飯山智史さん(22)。



国連でスピーチする飯山さん。Youtubeで動画を見ることができる。左は「マゼンタ・スター」のステッカー

は、小田原市出身で東京大学3年の飯山智史さん(22)。「東京都在任中。同大学4年で横浜市出身の町田紘太さん(25)らと「マゼンタ・スター」というマークを考案し、世界中へ発信している。マークは、マゼンタと呼ばれる明るく鮮やかな赤紫色(シヨッキンクピンク)の円の中に17角形の枠と星が描かれたデザイン。マゼンタは、国連が「国や人の不平等をなくそう」と進める運動のテ

ーマカラーでもある。このマークを缶バッチやステッカーなどにして身につければ、「協力が必要な時は、どうぞ私に声をかけて」という意思表示。「自分は協力者」と示し、助けが必要な人から気軽に話しかけてもらえるようにする。すなわち、「協力者カミングアウト」の推進こそが、同プロジェクトの狙いという。

飯山さんたちが目指すのは、障害のある人や高齢者、妊婦、さらに小さな子供や旅行中の外国人らが必要に応じて気軽に助けを求められることができる社会の仕組みづくり。2020年の東京五輪・パラリンピックを控え国内では「おもてなし」の心構えのひと

マゼンタ・スター 国連でもプレゼン 飯山さんは、体の弱い友人から、電車内で席を譲ってもらうにも躊躇してしまう、といった話を聞くにつけ、自分にも何かできないかと考えていた。「誰もが生きやすい社会のために、一人ひとりがもっと優しくなれば」との思いは、同大学の井筒節特任准教授(元国連職員)の元での学んだことから、世界へと広がった。同教授のクラスで学

ったという。プリンターは災害対策本部で活用を予定。災害発生時には、被害や対応状況をまとめて印刷し本部内に貼り出し、情報共有や対策の検討などに使う。道路の通行可否を示す地図

に重宝される。同協会は塗装技術の向上や技術者育成事業を推進するほか、公益目的として地域防災の支援にも努めている。2013年度から支部が位置する自治体に防災資機材の寄付を開

つとして、また、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」「誰ひとり取り残さない社会の実現」へ向け、同プロジェクトは国内外から注目されている。

昨年12月には、国連ニューヨーク本部で開かれた「国際障害者デー」のパネルディスカッションに招かれ、飯山さんは若者代表としてスピーチ。ユニセフや世界銀行などの代表者らを前に同プロジェクトを紹介した。

飯山さんは、活動を進める上でさらに学びを深めようと、文学部から医学部へ転部もした。専攻は健康科学や精神保健学。今夏にはアジア諸国を訪問し、同プロジェクトをさらに広める計画を立てている。

「おかげさまで 創刊72周年」

あちこちの花が盛り。4月10日に目標額の100万円を超える109万7000円が集まった。

は、虫たで、チョコが次々に事をして生まれ

は起らないと前置きという。市役所庁舎で開かれた寄贈式には、生形代表理事をはじめ、小田原支部会員でもある笠原誠副理事長らが出席した。